

親と子どもの育ちをつなぐ子育て支援 —親子遊びの記録に見られる母親の関わりの変化—

高畑 芳美*

Child-care support to facilitate mother-child interaction during play : Changes in the mother-child relation

This study attempted to clarify how mother-child relationships change as a result of child-care support provided during play. We focused on mothers' interactions with their child during play in a child-care support room where a supporter organized the play area and was present during play sessions. Observation data of 155 mother-child pairs were recorded by KH coder.

The results showed that mothers changed how they used distance and voice with their child, depending on the child's development. Mothers cuddled the child as the supporter interacted with the child during play and performed the activities suggested by the supporter.

The findings suggest that supporters need to set up the play environment according to the child's development and explain the meaning and relevance of the play to mothers. The results showed that these two factors significantly strengthened the positive mother-child relationship.

1. 問題の所在

平成27年4月、子ども・子育て支援新制度¹⁾が施行された。子育てを社会全体で支える体制への大きな転換期である。親子の居場所作りとして始まった地域子育て支援拠点事業は、厚生労働省の調査²⁾によると、全国に5,941か所(平成26年度)設置されている。少子高齢化社会と言われるが、子育て支援の場には大勢の親子が遊びにくる。渡辺(2014)³⁾が、つどいの広場の利用者(親)を対象に行った平成16年度の調査では、利用することにより、「子育てに関する知識や情報が得られ、子育てをされていて安心感をもつようになった」と言う。子育てをしている母親にとって、親子の遊びは日常的なもので、「子どもと楽しく遊びたい」と思う母親は多いだろう。そのため、母親はあちこちで開催される子育て支援のイベントに意欲的

に参加しようとする。しかし、大豆生田(2013)⁴⁾は、「いつでも気軽にベビーカーを押して親子が集えるような広場やセンターがあちこちできたことは非常に評価すべきことである。しかし、一部のセンター等では保育士主導のイベント的な内容が中心で、母親は日替わりで楽しいメニューを求めていくつもの近隣のセンターを歩き回るというジプシー化現象を生み出した」と問題を指摘している。この指摘から、保育士主導のイベント的要素が強い子育て支援では、子どもの自然な遊びが生まれたり主体的に母親が子どもとの遊びに関わったりする機会が得にくいことが示唆されよう。

本研究では、親子が思い思いに遊びを楽しめる制約の少ない環境の中で、母親が子どもの遊びにどのように寄り添い、遊びの意義を感じとり、自身の関わりを変化させていくのかを見ていきたい。それは、前述したように昨今の子育て支援がサービスに重きをおいたイベント的な内容を重視しがちで、本来の自然な親子の関わり遊びの価値が見

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

過ごされてしまっているのではないかという危惧を感じたからである。

子どもを母親から預かり保育する場合は、乳児保育として専門的に0、1、2歳児の発達や、それに伴う行動の変化を捉える視点を有し、直接子どもに働きかけることができる。しかし、子育て支援の場は、子どもと母親という二者関係を支援者は一歩外側から見守ることになり、保育とは違った支援の難しさがある。

また、親子の関係は他者から与えられたマニュアルで作られるものではない。それぞれの親子によって違いがあり、母親が試行錯誤を繰り返しオリジナルな関係を作り上げていくものであろう。

親子の遊びに絞り、先行研究を概観する。母親のポジティブな育児感情についての研究では、荒牧(2009)⁵⁾が、幼稚園で行われている「園庭開放」や「親子活動」は、親子と一緒に関わるための場所や機会、時間を提供するという意味で「参加型・協働型の支援」とし、育児に対する肯定感と関連があると述べている。この研究は、「親子の遊び」の効果を示唆するものであるが、具体的な遊びの内容は言及されていない。田中ら(2013)⁶⁾は、未就園児と在園児が関わるという異年齢交流型の子育て支援プログラムを実施した。子育て親子を支援する地域の中核的な役割を担う保育所の実践として、照井ら(2014)⁷⁾は、保護者が保育所から支援を受けつつ主体的にサークル活動を行うようになったプロセスをまとめた。宮本・藤崎(2015)⁸⁾は、保育参加後に懇談会を実施し、親が園生活にかかわることで視野を広げ、成果をあげたと報告をしている。これらの研究は、保育の場が子育てを地域で支え合う共同的な場として機能し始めてきたあらわれと言えよう。保育参加型のプログラムやイベントは、消極的な親を巻き込める効果があると考えられる。しかし、これらは保育者側が設定した活動への受動的参加に過ぎず、一過性の楽しい雰囲気や達成感で終わってしまう可能性が少なくない。松井(2015)⁹⁾は、保育所において0、1、2歳児クラスを対象に一

人ひとりの子どものポートフォリオを作成し、それが保護者の主体的な育児参加につながる意識の変化を生じさせたかアンケート結果にて示し、保護者は「保育者は子どもを大切にしてくれる存在、信頼できる存在」という見方を持ち、行事時の保護者の態度が協力的になったと報告している。記録を共有することで、親の保育への理解が深まり、副次的には子どもの成長をみる視点や子ども理解が深まったと言えるが、保育の場で子どもと保育者の遊びを親が見たり聞いたりすることと、家庭の生活の中で親が子どもと楽しく遊び、関わりの意味を考えることは、同義ではないだろう。

脇田ら(2016)¹⁰⁾は、子育て支援の基本は目の前にいる子どもがどんなことが好きで何に興味があり、どんな関わりだと落ち着きやすいのか、どんなことに不安を感じやすく、どんなことを嫌がるのか、といった日常生活の中での子どもの様子と一緒に思いを巡らせ、親の受け止め方に寄り添いながら、親と子が共に育っていくプロセスを支えていくことであると述べている。高畑(2015)¹¹⁾は、子育て支援ルームにおいて、ニュージーランドのLearning Storyを援用した記録方法を用い、親子遊びのエピソードを記録し母親達と共有することで、0歳児の母親達の子どもへの見方や視点の変化が見られるようになったと報告した。「乳児期後半は、人見知りや後追いが始まり親子の人間関係に緊張が生じやすく、坐位や四つ這い、歩行の獲得等運動面の変化も大きく、『できたか』『できないか』という評価に母親は一喜一憂する。この時期の親子遊びのプロセスに寄り添い、見える形で成長過程を示し、いつでも読み返せるツールがあることは貴重である」と述べている。実際に子育て支援の場で我が子の写真を撮り、ブログやフェイスブックに掲載している母親達は多い。しかし、それは「可愛い」という自己満足にとどまってしまうがちになるのではないだろうか。したがって、0、1、2歳児の親子が気軽に利用できる子育て支援の場において、母親と子どもと一緒に遊び、スタッフがその様子を記

録し、母親が見たい時に自由に振り返ることができるといったツールを用意する支援は、有用であると考える。

親子の関係は、すぐ目に見える変化として表れにくいものであり、支援者にとっても、関わりの変化をとらえる視点が必要であろう。本研究はそのためのエビデンスを提供し、来所者数やイベントの数、情報提供数といったサービスを重視するこれまでの一般的な子育て支援の評価の在り方を考える視座が示せることを目指す。

2. 研究の目的

本研究は、親子遊びのエピソードを元に、母親の子どもへの関わりの変化を明らかにする。そして、親子遊びのエピソードが、子育て支援ルームの目的である母親の育ちを促す有効なツールかどうかについて検証する。

3. 方法

1) 分析対象

A大学の子育て支援ルームを利用する0、1、

2歳児親子のエピソード(資料1)のうち、著者が、2014年10月～2016年3月までに記録した155(0歳児:27、1歳児:65、2歳児:63)の中から、「母親の関わり」に関する部分を抽出し、エピソード記録(下線部)として分析対象とする。


2) エピソード作成の手続き

エピソードの作成は、子育て支援ルームのスタッフ3名が親子の遊びを参与観察しながら、その日の子どもの最も集中し繰り返し遊んでいる場面を撮影する。A4サイズ1枚の用紙に写真と共に記述する。そのエピソードを端的に表す「タイトル」をつけ、「振り返り」に事例に見られる「遊びの中の学び」(儀野・名須川・高畑2016)¹²⁾に照らした気づきをまとめる。エピソードの質の担保と中立性を維持するため、スタッフを中心に週1回程度の割合でエピソード検討会を開き、スタッフ間の共通理解をはかった。

エピソードは、子ども一人につき1冊ずつ用意したポケットファイルに入れ、鍵のかかる保管庫に収納し、母親が読んだり、コメントを書き込んだりする際スタッフが出し入れする。また、子育て

資料1 エピソードの例

(下線部分が、今回分析対象とした「母親の関わり」を示す)

5月00日(木)	タイトル「赤ちゃんたちが、並んでいます」	赤ちゃん (女児・2歳0か月)	記録:△△
<p>—エピソード—</p> <p>1歳の頃に比べ、ルームに遊びにくるときは、自分なりに「OOしよう」と意図がはっきりしてきた。</p> <p>今日も、来室するなりままごとコーナーに直行した。</p> <p>ベッドに寝ている人形や、ベビーカーに乗っている人形を、どんとどんと、ままごとコーナーのじゅうたんの上に並べて座らせていく。</p> <p>並べるのが楽しくなったようで、くまのぬいぐるみも探してきて並べた。</p> <p>次に、1つの人形に1つの野菜や果物となるように、ひざの上に置いていく。ぬいぐるみには、一瞬考えて、前に置くことにした。</p> <p>ちゃんと一体ずつ前に人参とママが置いてある。</p> <p>後半は、「はい、どーぞ」と言いながら、食べ物と交換する遊びになった。</p> <p><u>お母さんが、人形と横並びに座り、人形の代わりに「ありがと。うーん、私は、いちごがいいな」と言ってくれるのが、うれしい様子。</u></p> <p><u>ビヨンビヨン跳ねながら、「いちご、はい」と、棚や冷蔵庫からいちごを探してきて、お母さんの方をチラッと見た後、人形に「どーぞ」と置いていく。</u></p> <p><u>お母さんに「きゅうりください」と言われて、きゅうりを探しに行く。</u></p> <p><u>お母さんがさりげなく赤ちゃんが見えやすいところにきゅうりを置いた。</u></p> <p>棚の中をのぞいて、見つけたきゅうりをもって、お母さんのところに「これ、きゅうり?」と確認しに行く。ちょっと不安になったように、指が口に入っている。「そうそう、それでいいよ」と、お母さんに優しく言われて安心した様子で、指を離す。</p> <p>さっきの笑顔に戻って、人形のところへいそいそと持っていく。今度は、お皿に乗せることにしたようだ。</p> <p>—振り返り—</p> <p>友達とするのをじっと見て、しばらくしてから真似をするという遊びが続いていたが、この数回は、自分なりに遊びを考えて、楽しめるようになってきた。こうして、人形をただ並べるのではなく、ちゃんと座らせ、一人にひとつずつ食べ物と渡していき気持ちが、可愛い。「この子にはこれ」と考えているらしく、赤ちゃんなりに、1番合うものを選んできたという風に、自信をもって前に置いていた。小さな自信は時と揺らぐが、お母さんの支えを受け乗り越えることで、より確かな自信となっていく。</p>			
			

て支援ルーム退室（入園や転動等）時には、エピソードの入ったファイルを持ち帰る。

2016年3月末現在の登録数は、474人（男児233人、女児241人）、1か月から5歳5か月の子どもが利用している。1日当たりの利用は、平均22組（親子49名）。本研究で分析するエピソードは2年引き続き利用している数名を除き、横断的なエピソードから抜き出した。

3) 倫理的配慮

子育て支援ルームの登録時、遊びの記録を取ることを説明し、親から研究への同意を文書にて得、個人情報の保護に配慮した。エピソード記録の分析にあたりテキスト型データを入力する際、個人名を外し、子ども・男の子・女の子・お母さん・お父さん・友達と表記し匿名性に配慮した。

4) 子育て支援ルームの概要

子育て支援ルームの施設や遊び環境の設定は、母親の関わりを考察するうえで重要なポイントになると考え、本研究対象である子育て支援ルームの概要を述べる。

子育て支援ルームは、週3日午前9時から12時まで開室され、施設は、**図1**のような構造である。「プレイルーム」(150㎡)は、乳児用の畳コーナー、ままごとコーナー、楽器コーナー、ボールハウス、プール、ベビーベット

ール、滑り台、階段やスロープ等を組み合わせたハイハイランドという運動コーナーがある。0、1、2歳の各年齢に合う高さの机と椅子があり、子どもの手の届く高さの棚に並ぶ木製の人形の家セットやカートレイン、パズル等の玩具は自由に出し入れできる。季節や利用者の状況に合わせ、本学幼年教育系コースの学部生による手作り玩具、魚釣り・布製絵本・福笑い・マラカスなども置く。「ホットルーム」(50㎡)は、絵本コーナー、お絵描きコーナーがあり、静かな雰囲気のある場所である。「スタッフルーム」(66㎡)は、授乳コーナーと、親子で食事や製作をする座卓があり、母親は自分の子どもの記録を書く。「ウッドデッキ」(20㎡)には、砂場と足洗い場があり、たらいやビニールプールで水遊びやフィンガーペインティングができる。

5) 分析方法

本研究は、0、1、2歳児の遊びに関わる母親の行動の傾向を明らかにするため、1つ1つの事例研究的な手法を採用せず、テキストマイニングによる分析を試みた。テキストマイニングは、文書を客観的に分析することで、文書の大筋を探り、文書中に隠された構造を把握するうえで有用である。解析ソフトとして、KH Coder 2.xリファレ

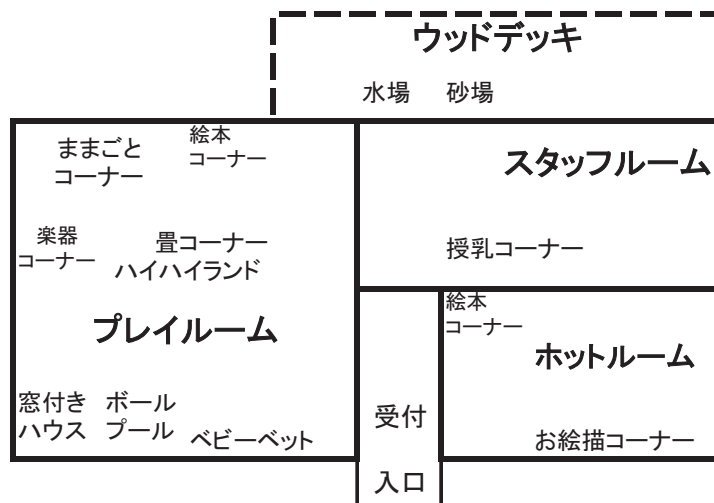


図1 施設の概要

ンス (Windows版) を使用した。KH Coderは、樋口・川端 (2014) が開発した計量テキスト分析用のフリーソフトウェアである¹³⁾。KH Coderの機能と分析手順に添って分析を行った。

4. 結果

「母親の関わり」の総抽出語数は、155のエピソードの中から、母親の関わり部分646の文を切り分けたエピソード記録を、KH Coderで分析したところ、13,528語であった。そのうち、助詞や助動詞など一般的に用いられる語を除いた「使用語」は、5,281語、分析対象とする「異なり語数」は、1,418語含まれていた。「母親の関わり」を表す語の使われ方を確認するため、品詞を動詞に絞り特徴づける語をJaccard係数で値が大きい順に15語ずつリストアップしたものが、表1である。

次に、エピソード記録の中の「母親の関わり」を構成する28のコード (概念) を抽出し、各文章に対してコードを割り当てていくためのコーディングルールを作成した。まず、語の用いられ方を調べるため、KH Coderのコンコーダンス機能を利用し文章の探索を行った。例えば、1歳児の頻出語「合う」は、「バギーを取られてしまった子どもは不満げな表情だが、取り返すことができず母親の方を見る。取った方のお母さんと目が合う

と、そのお母さんは『それはお友達が使っているバギーでしょう』と取った子どもに声をかけた」という事例と「『ほら、こっちの窓だよ』とお母さんが声をかけるが、振り向くタイミングが合わないため、窓は閉まってしまう」という事例では用いられ方が違う。そこで、母親の関わり方をコードにするコーディングルールを、「目 and 合う」は「視線に応じる」に、「合う+not」は“ずれる”という風に分類した。このような作業を繰り返し、エピソード記録の中の母親の関わりをすべて含むコーディングルールを作成した。表2に、作成したコードとコーディングルールを示す。

今回のクロス集計では、各年齢のコードの出現率に有意差は見られなかった。そこで、結果を、図2のバブルプロットで示した。バブルプロットでは、コードの出現率が大きいほど、円が大きくなり、そのコードが他の箇所よりも多く出てくるほど円の色が濃くなる。そこで、円の大きさの違いからその母親の関わり行動が全体のデータの中で占める割合を、円の濃さからその母親の関わり行動が出現する年齢層の比率を示した。

5. 考察

各年齢における母親の関わりを比較し考察する。

①子どもの発達に合わせた母親の関わりの変化

表1 0.1.2歳児への母親の関わりを表す抽出語 (動詞)

0歳児					1歳児					2歳児				
No	抽出語	品詞	全体	Jaccard	No	抽出語	品詞	全体	Jaccard	No	抽出語	品詞	全体	Jaccard
1	見守る	動詞	10 (0.064)	0.2333	1	見る	動詞	44 (0.333)	0.3333	1	遊ぶ	動詞	25 (0.189)	0.1867
2	思う	動詞	64 (0.408)	0.1519	2	思う	動詞	47 (0.356)	0.3068	2	気づく	動詞	12 (0.091)	0.1515
3	示す	動詞	5 (0.032)	0.1429	3	見守る	動詞	14 (0.106)	0.1714	3	違う	動詞	10 (0.076)	0.1045
4	楽しむ	動詞	20 (0.127)	0.119	4	楽しむ	動詞	15 (0.114)	0.1216	4	言う	動詞	14 (0.106)	0.0986
5	関わる	動詞	14 (0.089)	0.1081	5	楽しめる	動詞	12 (0.091)	0.1111	5	読む	動詞	7 (0.053)	0.0923
6	防ぐ	動詞	4 (0.025)	0.1071	6	持つ	動詞	13 (0.098)	0.1096	6	感じる	動詞	9 (0.068)	0.0896
7	感じる	動詞	16 (0.102)	0.1026	7	動く	動詞	9 (0.068)	0.1	7	入る	動詞	5 (0.038)	0.0781
8	見える	動詞	6 (0.038)	0.1	8	合う	動詞	7 (0.053)	0.087	8	変わる	動詞	7 (0.053)	0.0758
9	追う	動詞	6 (0.038)	0.1	9	関わる	動詞	10 (0.076)	0.0833	9	聞く	動詞	5 (0.038)	0.0615
10	応じる	動詞	8 (0.051)	0.0938	10	試す	動詞	7 (0.053)	0.0714	10	繰り返す	動詞	6 (0.045)	0.0606
11	変わる	動詞	11 (0.070)	0.0857	11	考える	動詞	9 (0.068)	0.0694	11	思える	動詞	6 (0.045)	0.0606
12	動く	動詞	12 (0.076)	0.0833	12	確かめる	動詞	4 (0.030)	0.0588	12	伝える	動詞	3 (0.023)	0.0469
13	持つ	動詞	16 (0.102)	0.075	13	待つ	動詞	4 (0.030)	0.0588	13	見せる	動詞	4 (0.030)	0.0462
14	気付く	動詞	2 (0.013)	0.0741	14	喜ぶ	動詞	5 (0.038)	0.058	14	教える	動詞	4 (0.030)	0.0462
15	褒める	動詞	4 (0.025)	0.069	15	向ける	動詞	5 (0.038)	0.058	15	認める	動詞	5 (0.038)	0.0455

表2 母親の関わりコードとコーディングルール

No	コード名	コーディングに用いた主な語	コードの意味
1	安全基地になる	安全基地+なる くつつく	安全基地(子どもがくつつく場所、戻る場所)
2	心の居場所になる	心の居場所+なる 大丈夫+思う 待つ	心の居場所(距離は離れても大丈夫)
3	見守る	見守る 遊ぶ 気持ち+向ける	見守る(子どもの遊びを見守る)
4	防ぐ	防ぐ 守る 動く 危ない 危険	防ぐ(子どもが危険に陥らないようにそばについて守る)
5	共感する	共感する 理解する 応じる 気持ち+感じる	共感する(子どもの遊びの意味や気持ちを理解して応じる)
6	賞賛する	賞賛する 認める 褒める 喜ぶ	賞賛する(子どもの喜びや頑張りを認め褒め、一緒に喜ぶ)
7	視線に応じる	見る 答える 目が合う	視線に応じる(子どもからの視線に答える)
8	注目する	注目する 子ども+見る	注目する(子どもの行動を見て反応を返す)
9	手助けする	手助けする 手伝う 子ども+やりたい したい	手助けする(子どものしたいことを手伝う)
10	真似る	真似る 一緒にの動き 模倣	真似る(子どものすることや発声を大人が真似る)
11	気持ちを代弁する	代弁する 言う 考える 気持ち	気持ちの代弁(子どもの言いたいことを言う)
12	モデルになる	見せる 示す 教える 示す 真似される	モデルになる(遊んで見せる、生活のモデルになる)
13	遊び相手になる	遊ぶ 関わる 楽しむ 仲間に入る	遊び相手になる(直接子どもと関わって遊ぶ。人形やぬいぐるみの声を代弁する)
14	盛り上げる	楽しい 雰囲気 作る 繰り返す	遊びの楽しい雰囲気づくりを作る
15	競争する	競争する 対戦する	競争する(遊びの中で競い合ったり対戦したりして遊ぶ)
16	促す	促す 伝える 行動 ことば 試す	促す(子どもにしてほしい行動をことばにして伝える)
17	応援する	応援する 励ます 声をかける カづける	応援する(ことばで子どもを励ます、カづける、声をかける)
18	読み聞かせる	読む 聞かせる 見せる 絵本 話	読み聞かせる(絵本やお話を読み聞かせる)
19	準備する	準備する 用意する 待つ	準備する(子どもの行動を予測して、用意しておく)
20	切り上げる	切り上げる 中断する やめる	切り上げる(子どもの遊びを中断する)
21	急き立てる	急き立てる 早く+言う 待てない	急き立てる(子どもの気持ちには添わず、急がせる)
22	制止する	制止する 止める 遊ばない	制止する(子どもの行動を止める、やめさせる)
23	監視する	見張る 視線を向ける 注意を払う	監視する(子どもの行動を見張る)
24	ずれる	ずれる 合わない 違う	ずれる(子どもの意図やタイミングに合わない関わりをする)
25	見直す	見直す 気づく 考える 気持ち 変わる	見直す(子どもの良い面に気づく)
26	振り返る	思い出す 確かめる	振り返る(子どもの以前の姿を思い出す)
27	お母さん同士のつなぎ	お母さん同士 動く 声をかける 一緒に	お母さん同士のつなぎ(お母さん同士が子どもの遊びの間をつなぐよう声をかけたり、動いたりする)
28	お母さん同士のつながり	お母さん同士 話す 聞く 言う	大人同士の気持ちや情報を共有する

“見守る”“防ぐ”“共感する”“賞賛する”“注目する”“手助けする”というポジティブな関わりは、どの年齢にも60%台と多く出現している。このことは、子どもが1番よく遊んでいる場面を記録したエピソードから抽出された母親の関わりであることがその要因であると考えられる。

0歳児の母親が、子どもの“安全基地”や“心の居場所”となる関わりは、10%台で、年齢があがるほど少なくなる。“視線に応じる”は1歳児の母親が0、2歳児の母親に比べて多く、1歳児の視線を母親がいち早く気づき受け止めている様子が伺える。母親の“気持ちを代弁する”“促す”行動は、各年齢40%台だったが、年齢に応じて多くなる。2歳児のエピソードには、「貸して」「ちょっと待って」「あとで」など子どもが友達とやりとりする時の言葉を書いて聞かせる場面が多かった。

以上のことから、母親の関わりは、子どもの発達に合わせて、0歳児の居場所や安全基地になる関わりから、1歳児の子どもの遊びに共感や励ま

しを送る関わり、2歳児の友達との関係がうまくいくようモデルを示す関わりへ変化していることが読み取れる。

②真似る、真似される関わりの持つ2つの意味

“真似る”は、“モデルになる”と逆に、母親の方が子どもの遊びを真似するという意味で定義した。子どもは自分の遊びを真似る大人(母親や学生)に気づき、例えばボールプールでバシャバシャとボールを散らしては、大人が同じようにしてくれるかどうか確認するなどというエピソードが多かった。特に1歳児は、自分に注目したり、真似たりしてくれる母親や大人を自分の遊びの対象とすることが多いといえる。

一方、ままごと遊びに多く出現する“モデルになる”では、母親自身がモデルとして示そうという意識に関係なく、「一枚ずつ皿を拭く」「豆の皮をむく」「鍋をかき混ぜて味見する」等、家庭生活の母親の行動がそのまま再現されていた。子どもに真似されるままごと遊びを見て、母親は毎日の生活の中で、いかに自分が子どもから見られて

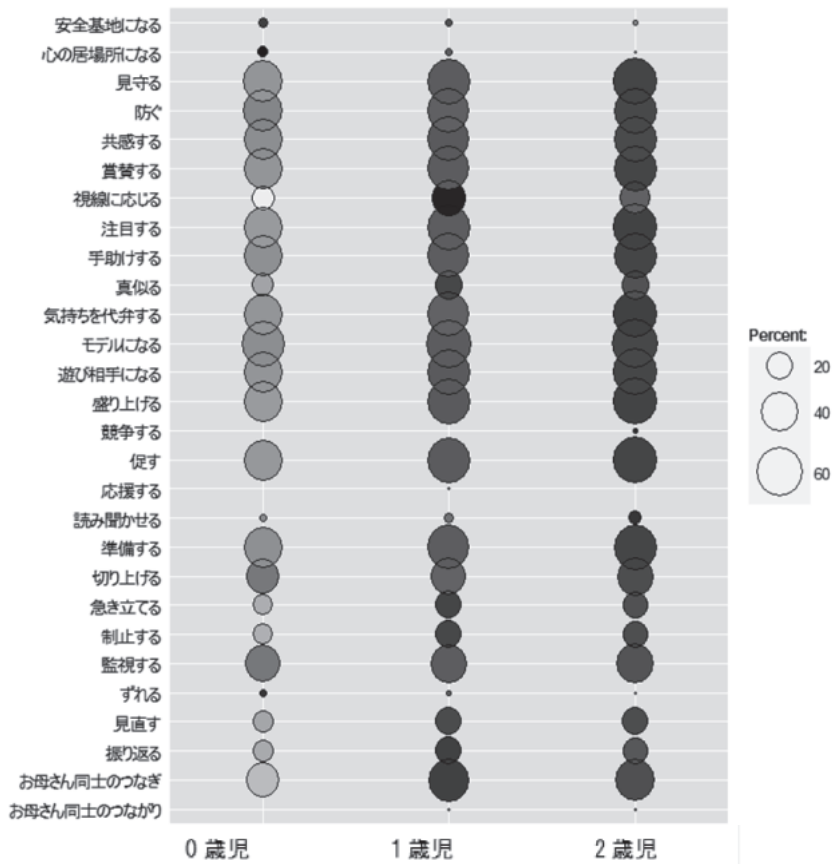


図2 各年齢別母親の関わりコードの出現率

いるのかに気づくのである。西 (2014) は、「遊びを教えてほしいという母親の多くは遊びと生活を切り離し、子どもと向き合って何をすべきか戸惑っている」と述べ、「身近な生活そのものの中にたくさんの遊びがあり、学びがあることを母親に気づいてもらうことが大切だ」¹⁴⁾ と言う。子育て支援ルームでは、このように母親の姿をモデルにした再現遊びが数多く繰り返され、母親同士で「私、こんなことしていたかしら」と笑い合う姿が見られた。

③子どもの気持ちに添った関わりと添わない関わり

本研究で収集したエピソードには、子どもの“遊び相手になる”や子どもの遊びを“盛り上げる”という直接的な関わり他、子どもが遊び易いように玩具を近づけたり向きを変えたりのような

“準備する”という間接的な関わりが40%台で、年齢が高くなるほど多くなっている。このことから、親子で遊ぶ経験を重ねる中で、母親自身が子どもの気持ちに添った関わりが上手くなっていることが推察できる。

また、子ども同士の間で生じる誤解やいざこざに対しても、「こう言ってみたら」など“促す”関わりにより、子どもの気持ちがあくじけることなく、友達との良好なやりとり遊びへと発展している。本研究で取り上げたエピソードは、そういう上手くいった場面を取り上げているといえる。

反対に、子どもと“ずれる”関わりは、0歳児の母親の関わりに比較的多く見られ、ことばにならない0歳児の思いに合わせて関わることの難しさを抱えていることがわかる。歩行を獲得し興味

のままに動き回る1歳児に対し、遊びを“切り上げる”や「早く」と“急ぎ立てる”関わり、「危ない」と“制止する”関わりは、他の年齢に比べて多い。「危なくないか」「人に迷惑をかけていないか」と“監視する”は各年齢とも40%台で、家庭外の場で母親が子どもに神経を使っている様子もうかがえる。

“読み聞かせる”は、年齢が高くなるにつれ増える。絵本コーナーでは、子どもは静かに母親の膝で絵本を読み聞かせてもらっている。その1組の親子の姿に誘われて、自然に数組の親子が集まり、読み聞かせの輪が広がるという場面はしばしば観察された。

母親が子どもの気持ちに添った関わりをしていると、周囲の母親もその関わりを真似するようになる。子育て支援ルームでは、子どもにも母親にも、ルールで規制するのではなく、良い見本に注目することで自発的に母親が良い関わりを取り入れていけるよう配慮している。その成果であろう。

④自分と子どもの関わりや遊びを振り返る

“見直す”“振り返る”は、各年齢で20%ずつ出現していた。遊びの傍らにいる支援者やボランティアの学生、他の保護者に向けて発せられた母親の語りである。母親自身が、今まで家庭生活で意識していなかったことを、子どもとの遊びで気づき、日々の家庭の生活に子どもの学びがあると評価できるようになった表れと考えられる。入園前の0、1、2歳児を持つ母親にとって、子育て支援ルームは子どもを客観的に見ることのできる貴重な学びの場であると言える。

また、我が子のエピソード記録を持ち帰った母親が、家族で読み「そうそう、子どもはこんなことを遊びの中で考えていた。記録に残しておいてくださった先生に感謝です」との手紙を頂いた。無我夢中で子育てする母親にとって、立ち止まって記録を読んだり、家族や友達と見合っ話したりする「振り返りの時間」は、母親育ちに必要時間であると言える。

6. まとめと今後の課題

以上の考察をもとに、「つなぎ」の視点から、子育て支援ルームの役割と親子遊びのエピソードの有効性についてまとめる。本研究における「つなぎ」は、独立するものとももの間に入って、引き合わせたりつないだり調整したりする役割をになうものと定義する。

1) 支援の場との「つなぎ」

朝、家から出て子育て支援の場を利用しようとする母親は、生活の時間を調整し、おむつや着替えなどを準備し、身支度を整えて出かける。出産まで身ひとつで軽々動くことができた母親にとって大変な労力を要するものである。これは、高畑(2014)¹⁵⁾のインタビュー調査の母親の語りに見られる「のしかかる負担感に押しつぶされそうな孤立した子育てからの脱却」のための作業である。子育て支援の場にたどり着いた母親は、居場所を得ることで子どもとしっかり関わろうという心の余裕が持てる。

子育て支援の場に求められるものは、イベントとして遊びを提供したり、慣例として母親の学習講座を開いたりするのではない。親子の家庭生活の延長線上にある居場所となることである。母親が子どもと選んだ遊びを自由にゆったりと体験できる環境の設定とスタッフの穏やかな見守りにより、親子が初めて出ていく社会への敷居を低くし、母親が必要な支援につながるきっかけを得やすくなるといえる。

2) 母親と子どもの「つなぎ」

昨今の親子の触れ合い活動というと、「ベビーマッサージ」「手遊び」「親子の体操、水泳教室」等、形から入ろうとする傾向があるように思われる。その原因として、0、1、2歳児が本当にやりたい「遊び」とは何かを読み取れないことが大きく影響していると考えられる。

本研究で収集した0、1、2歳児が夢中になって真似る遊びの多くは、生活する家庭の再現遊びであった。母親がご飯を作っている台所に這って

行き、鍋やボールを引っ張り出す、洗濯物をたたむそばで洗濯ばさみを散らかすなど、母親からは、困ったいたずらにしか見えない0歳児の遊びは、切り離される傾向にある。しかし、家庭生活の中にこそ、この時期の子どもがあこがれ、真似したい遊びが存在する。そのことを母親に理論で説明するのではなく、一緒に遊び、子どもが夢中になってする再現遊びを見ることにより、母親自身が主体的に気づくことが重要ではないだろうか。そして、仲間と共に振り返り、「うちもそう」と共感をえられることで母親は、子どもに対する心のゆとりができ自分の関わりに自信が持てるだろう。

このように、母親と子どもがポジティブに関われるよう「つなぐ」こと、自分の子どもから母親自身が「遊び」の意味や面白さが学べること、それが子育て支援ルームの役割と言えよう。

3) 子ども同士の「つなぎ」

0、1、2歳児は、子ども同士だけでは上手くつなげられない。人形用のバギーをめくり、取り合いは少ないものの、子ども同士の攻防は繰り広げられていた。こうした子ども同士が自己主張をぶつけ合う経験の重要性について、専門の保育者は理解できている。しかし、母親は間に入って早くトラブルをおさめようとしたり、人に優しくするように言い聞かせたりしたくなる。元気のよい子どもの母親は、「やかましくてすみません」と肩身を狭くし、子どもがトラブルを起こさないようそばを離れられず、先回りし、制止してしまう。母親同士の関係を気遣うが故の行動である場合もある。井桁(2014)¹⁶⁾は、「トラブルをいろいろな形で経験した子どもは人とのコミュニケーションの知識がたくさんある子ども」と評価し、「コミュニケーション力とは、自分の気持ちを押し殺して他者に合わせるのではなく、自分の思いと相手の思いを上手に調節する力」で「様々な経験を通して時間をかけて育つものである」と言う。子育て支援ルームでは、母親が子どもに促したり、モデルを示したり、気持ちを代弁したりする「つなぎ」の役割を担っている。母親自身が、この「つ

なぎ」の役割を体験しておくことで、子ども同士の遊びのプロセスに気づけるのである。「うちの子がけがをさせられた」と幼稚園や保育所に一方的に訴えずにすむよう、入園前の段階で、母親が自分の子どもと友達の関わりを見守り、調節する力の育ちを考える体験を積むことは、大変重要なことであると考えられる。

4) 母親同士の「つなぎ」

子育て支援ルームには、遊びを介した「つなぎ」と、先述した遊びを振り返る「つなぎ」の2つが存在すると考えられる。

大人同士が形式的ではなく、仲良くなるためには、「遊び」を介在させる場面が必要である。絵本の読み聞かせの輪が広がったように、子どもの遊びに加わる形で母親同士がつながるきっかけは生まれていた。楽しい遊びには周囲の親子も寄っていき遊びの輪は自然に広がる。鬼遊びでは、子どもの手を引き、逃げる側と、追いかける側で親同士が役割を分担していた。このようなエピソードに見られた母親が子どもと夢中になって遊んでしまう雰囲気づくりも、子育て支援の場の重要な役割であると考えられる。

また、子どもの遊びの記録であるエピソードは、母親同士をつなぐツールでもある。「子どもの遊びのエピソードを書いてもらえる」と母親同士の話題になり、ファイルの見せ合いをきっかけに来訪する親子が増えている。スタッフルームでは、エピソードを友達に見せて話し合ったり、コメントを書き込んだりと、母親同士の「つなぎ」のツールとしての活用が広がっている。さまざまなネット情報があふれる中、自身の子育て、子どもとの遊びや関わりについて客観的に見直す機会を母親達は求めているといえる。

そして、エピソード検討会は、スタッフ同士の「つなぎ」も生む。子育て支援の質の担保の重要性から、子育て支援員研修¹⁷⁾が始まったが、そのような支援者研修でも活用できるツールであると言えよう。

最後に本研究の課題を述べる。本研究では、各

年齢のエピソード記録の数のばらつきが大きく、統計的な差を実証できなかった。今後も継続して親子遊びのエピソードを書きながら、母親の関わりの変化を実証的に示していきたい。並行して、本研究は横断的な分析であったことから、次は一人の母親がどのようなきっかけで関わりを見直し、行動を変化させたのかというプロセスを事例研究する必要があるだろう。そして、子育て支援者が親子関係を見守る評価ツールとして活用していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 内閣府子ども・子育て支援新制度施行準備室「子ども・子育て支援新制度について」(平成27年3月)
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsumeipff> [最終アクセス2015年5月5日]
- 2) 厚生労働省「平成26年度 地域子育て支援拠点事業実施状況」
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten_kasho26.pdf [最終アクセス2015年5月5日]
- 3) 渡辺顕一郎「地域子育て支援拠点における課題」渡辺顕一郎・橋本真紀編著『地域子育て支援拠点ガイドラインの手引—子ども家庭福祉の制度・実践をふまえて—(第2版)』中央法規出版株式会社、2014、pp. 122-125
- 4) 大豆生田啓友「保育の場における子育て支援の課題」保育学研究、第51巻、第1号、2013、p. 135
- 5) 荒牧美佐子「幼稚園児をもつ母親の育児感情と子育て支援」発達120号、ミネルヴァ書房、2009、pp. 29-36
- 6) 田中文昭・戸田有一・横川和章「幼稚園での異年齢交流型子育て支援プログラムにおける未就園児親子と在園児との関わり—行動観察記録のM-GTAによる質的分析」保育学研究、第51巻、第2号、2013、pp. 109-121
- 7) 照井裕子・岡本依子・菅野幸恵「母親たちの主体的活動としての音楽祭—保育所の支援からの自立プロセス」子育て研究、第4巻、2014、pp. 42-52
- 8) 宮本知子・藤崎春代「保育参加後における父親の語りの縦断的研究—父親が子どもの園生活に関わることによる視野の広がり—」保育学研究、第53巻、第2号、2015、pp. 96-107
- 9) 松井剛太「保育所における保護者の保育参加を目指したポートフォリオの作成」乳幼児教育学研究、第24号、2015、pp. 39-49
- 10) 脇田菜摘・永田雅子「親と子の“関係性”の視点を大切にしたい支援のために」発達、143、ミネルヴァ書房、2015、pp. 23-24
- 11) 高畑芳美「親と子育てを共有する『ラーニング・ストーリー』の試み—子育て支援ルームにおける親子遊びの記録から—」教育実践学論集、第17号、2016、pp. 126-127
- 12) 磯野久美子・名須川知子・高畑芳美「子育て支援ルームにおける「プレイストーリー」の試み」兵庫教育大学研究紀要、第48巻、2016、pp. 121-127
- 13) 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析」ナカニシヤ出版、2014、p. 25
- 14) 西智子「子育て支援と乳幼児の遊び」子育て支援と心理臨床、Vol8、福村出版、2014、p. 51
- 15) 高畑芳美「子育ての『主体』である母親を支援する幼稚園の役割」保育学研究、第52巻、第3号、2014、pp. 45-54
- 16) 井桁容子「ありのままの子育て やわらか母さんであるために」赤ちゃんとママ社、2014、p. 123
- 17) 内閣府「子育て支援員研修事業実施要項(案)」
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h270310/pdf/s3-2.pdf> [最終アクセス2016年5月7日]